

編集後記

『国際交流基金日本語教育紀要』第12号には計25本の投稿があり、厳正な審査の結果、研究論文1本、実践報告4本、報告4本、計9本が採用されました。

今号の投稿で特徴的だったのは、海外の実践報告や報告が大変多かったことです。中でも、「中等教育」「年少者教育」に関する内容を扱ったものが目立ちました。今号で採用になったのは2件のタイの取り組み、モンゴルの教科書開発、タスマニアのアドボカシー活動、ブラジルの現状調査などですが、他にも、授業実践やテスト、交流事業などについての研究や報告が複数投稿されました。また、他の角度から見ると、近年、日本語教育の中でも模索され議論され始めた「これからの時代を担う若者たちに必要な能力」を養うための試みが多く取り上げられるようになったと言うこともできます。「異文化理解能力」「自律的に活動する力」「コラボレーション」「ICTリテラシー」などがキーワードとなる実践が、中等教育や年少者教育にかぎらず、世界中から報告されました。本紀要に投稿する方々が、そのような趣向の先駆者であることは、そこに携わる者として、とても誇らしく思います。

ただ、一方で、採用に至らなかったものにも共通の課題がありました。それは、各実践が他者に伝わりにくかったこと、そして、自らの実践を客観的に評価できていないと感じられたことです。今後、同様の試みを行おうとする人にとって、きっと貴重な先例となると思われる実践が、その書き方によって公表されなくなってしまうことは、大変残念に思いました。「紀要に投稿する」ということは、「他者と共有する」という目的があると思います。つまり、一つの研究を読んだ人が、それを参考にして同じことを実行でき、かつ、同じ轍を踏まないようにすることができるものであることが必要です。ぜひ、執筆の際には、たとえば、自分とは離れた国で異なる状況にいる「読み手」にも伝わるように書くためには、どこからどのように何の情報を書くべきなのか、考えていただけたらと思います。また、特に本紀要の場合、実践報告であっても、「こういう実践をした」というだけでなく、その結果、何が得られ、何は課題として残ったのか、ということを客観的に評価して述べていただく必要があります。そのためには、そして実践自体のためにも、まず、実践の前に、その実践にどういう意味があるのか、何を目的にするのか、明確にしておくことが、振り返りにも有効だと思います。このような執筆を心がけることが、まさに、私達に求められる「新しい時代に必要な能力」の一つなのではないでしょうか。

日々の業務で忙しい中、それをまとめていくのは簡単なことではありませんが、その時間と努力を無駄にしないためにも、ぜひ、次号からの投稿では、今まで以上に「読み手」を意識した研究が世界中から投稿されますよう、お待ちしております。

築 島 史 恵 (『国際交流基金日本語教育紀要』編集委員長)